

島の深さ

神野麻郎

ヨットからだいぶ離れたところで建雄たておが泳いでいる。水中メガネにシユノーケルをつけた頭が消えたり現れたりする。モリを持って、今夜のおかずでも仕留めるつもりだろうか。さつき狭いキャビンの中で抱き合ったばかりなのにあいつは元氣だ。わたしは身体じゆうにオイルを塗りたくり、デッキの上に寝ころんで甲羅干ししている。上からも下からも襲ってくる思いきりの熱にうだりながら、少しだけ、なつかしいような気分を味わっている。それはかつての夏の記憶のようなもの。いつの夏のどの記憶というのではない。皮膚が覚えている、いくつとなくこうして海で過ごした夏の、記憶のエキスのようなもの。それを味わうためなら、もう、醜いシミが少しくらい増えた方がいい。でももうこんなふうには水着で甲羅干しできるのも、今年あたりまでかもしれない。

進介と有美は、島の人がただ「購買」と呼ぶ、漁業組合の共同購買部へ氷や食料の買い出しに行つてまだ帰らない。一時間以上も前に出かけたのに。二人は出会つてまだ二カ月ほどだから、わたしたちとちがつていつもいっしょにいる。今もどこかで人目を避けてよろしくやつているのだろう。

沖合には白い波頭も見えるのに、この入江の中は静かだ。そしてヨットと建雄とわたしのほかには誰もいない。大きな丸石の浜にゆつたりと波が寄せ、低いやさしい音を立てている。浜のなだらかなようすも背後に低い植物を生やしながら頂上まで険しく盛り上がる山のようにも、わたしの目にはもう親しい。この入江に停泊するのはもう四度目になる。最初は大学を卒業した年、それから二、三年おきにやつて来た。いつも夏、そしていつも建雄とヨットがいっしょだった。

北側は本島の緑濃い山、でも一部は荒々しく赤茶けた岩肌が露出している。その下に、この小島には不釣り合いに堂々とした防波堤の連なりがある。防波堤からこちら側の島、前島に吊り橋がかかり、ただ一つ本島と前島を結んでいるが、めつたにその橋を渡ってくる人はいない。こちら側には前島のほかにもう一つ形のよい属島があるが、いずれにも人家はなく、人為といえばただ港と多少の係船設備と小屋と草を生やしてあまり使われていなさそうなゲートボール場が一面あるだけだ。

はじめてこの島に来たときは、この風景に慣れなかった。本島と前島との間の高い防波堤がどうしても外来者を拒絶しているように思えた。この島に今までどんな歴史があったのかは知らないけれど、島の人々は、近ごろのレジャーブームに悪乗りした行政に圧力をかけられ、わたしたちのような外来者を受け入れる設

備を無人島の方に作る代わり、城塞のような防波堤を築いて自分たちの暮らしをすつぽり覆い隠してしまつたようにも見えた。ともかくこの丈高い防波堤は、外来者を隔離し、拒絶している。その後、仲良くなつた共同購買部の友恵さんに、四十年ほど前の島の航空写真を見せてもらったことがあるが、それにはまだ高い防波堤も吊り橋もなく、小さな漁港が波にさらされているばかりで、前島にも何の施設もなかった。でも島は全体として自足していた。

ああ、今夜は友恵さんに会いに行こう。彼女がいつものようにいてくれてよかった。もし彼女が不在だとわかっていたら、梅雨のころに建雄たちと今回のセーリングのコースを練つたとき、わたしはこの島に行こうと提案しなかつただろう。しづる建雄たちを説得もしなかつただろう。建雄たちはマリナーやリゾート施設の整つた小豆島あたりに行きたがつていたので。ただ遊ぶためならそちらの方がずっと楽しかつたはずだ。でも、わたしはこの島に来たかつた。最初の訪問の時から、なぜかよくはわからないがわたしはこの島に惹かれていた。この島のたえずまいやら人々の暮らしぶりが気にかかるのだ。そしてこの島の、いわばシンボルのような存在が、わたしにとっては友恵さんなのだ。でも友恵さんは今夜は暇だろうか。昨日はああだつたから、まだ忙しいのかもしれない。

昨日は到着して間もなく、島の葬儀に出くわして驚いた。それも死者は老人ではなく、わたしも見知つているまだ若い漁師だつた。昼過ぎに着いて棧橋に係留していると、集落の方から鉦の音が聞こえてきた。船の鳴らす疑問信号のように秒を数えるような間隔で、ひとしきりそれは続いた。気になって、吊り橋を渡り、防波堤の上まで行くと、小山の中腹の寺の境内に黒い服の人々が集つているのが見えた。熱のために揺れている空気の向こうに、白黒の幟がゆつくりと廻つていった。わたしの位置からは、目線より上の方にのぞむので、何やらしめやかな空の舞台劇を見ているようだつた。

夕方、有美と近くの民宿でシャワーを使わせてもらった後、「購買」に出かけて友恵さんに会えた。友恵さんは笑顔で再会を喜んでくれたのだが、目のあたりが赤かつた。そしていきなり、「俊ちゃんが、亡くなつてな」と言つた。「俊ちゃん」と言われてわたしはとっさにはわからなかつたが、友恵さんは当然わたしが「俊ちゃん」を知っているようにしゃべるのだつた。

聞いているうちに、わたしにもそれが誰だかわかつてきた。「俊ちゃん」は友恵さんの親友の幾子さんの弟で、その家は島では数少ない旅館と渡船業を営んでいる。わたしも以前に友恵さんといるときや旅館に風呂をもらいに行つたとき何度か会つて、人なつっこいその笑顔を覚えていた。俊ちゃんの船で、島を一巡りしてもらつたこともある。その俊ちゃんが、海で亡くなつたというのだ。いや、実は亡くなつたのはもう一カ月以上も前。釣り客を送つての帰り、海が急に荒れて難破し、そのまま行方不明になつたという。島の漁師が総出で捜索したが見つからなかつた。それが三日ほど前、遺体が浜に上がったというのだ。友恵さんはそ

う語って、涙を拭いた。そして、唐突な感じで、「あんた、今度はいつまでいられるの？」と訊いた。わたしが答えると、「そう。じゃあ、あしたにしよう。今日はつらいけんね。それに、幾子の家の手伝いもしてやりたいし。あしたまた話しましょ。あした、必ずね」と言った。

進介と有美が背中中のリュックや両手をいっぱいにして戻ってきた。

「あかんでここは。ロクなもん置いてないし、何でも高いしな」

「そうよ、そうよ。今どき自動販売機が一台もないやなんて信じられる？それに缶ジュースが何で一本百四十円もするん？スキー場といっしょやん」とぶつぶつ言っている。

「高いのは島までの運送費がかかっているからでしょ」とわたしは応じて、「遅かったね」とちよつと冷やかしてみる。進介が手を振って、

「ちやうねん、ちやうねん。神社にガジュマル見に行ってるん。こいつが見たいというから」

たしかに有美は、来る前から島のガジュマルの見物を楽しみにしていた。ネット上の記事に、ここにはガジュマルの群落があると書いてあったというのだ。有美はセーリングの経験はないが、ダイビングは学生時代からやっているといい、沖繩の海にも何度も潜りに行っているらしい。

ガジュマルならわたしも知っている。沖繩で樹木を少し注意深く見ていると必ず目に付く大木だ。学生時代のひと夏は奄美から沖繩の島々をセーリングしたが、ガジュマルはどの島でも目立った。巨大なものは気根を枝からいくつも垂らして地に届かせ、それが生長して枝や幹のように太っていた。樹上を見上げるともりもりと葉が広がり空をふさいで、お化けでも住んでいそうなくらいうっそうとしていた。実際、沖繩では、ガジュマルの古木にはキジムナーという妖怪が住むと何かの本に書いてあった。

「それで、どうだったん？」

「あかん、あかん。人に訊いて神社まで行ったんやけど、あることはあったけどね、小さな木やねん。こない、細うて。沖繩のとは全然ちやう。がっかりやった」

有美はそう言い捨てたが、わたしはそうは思わない。その神社の境内のガジュマルならわたしも前に見たことがある。あれも友恵さんが案内してくれたのだった。「島には、何も見るものないけどね」とすまなさそうに言いながら。御影石の鳥居に掛けた額に「当所神社」と書かれたその島の氏神は、集落の北側の感じのよい高台にあった。左右に桜や松の古木の繁る石敷きの境内の、社殿の横に、それは細い幹で、丈も低くぽつんと一つだけ立っていた。そして、馬のしっぽの毛のような気根を枝から垂らしていた。「これは榕樹というんよ。そう多くはないけど、島のあっちこちに生えてるわ。南方の植物で、ここに生えとるのは珍しいんだって。黒潮に乗って流れてきたんじやというわ」と友恵さんは説明してくれ

た。「すごいね。すごいことだね」とわたしは感激した。島崎藤村の「椰子の実」と同じような話ではないか。はるか南方から暖流に乗って流れ着いた樹木の種子がこの四国の小島に根を下ろした、それはドラマや日々の人間のいとなみと同じくらい、いや長い年月をかけて静かに行われた分だけ、それらよりもっとすごいことではないか。それをこの神社の境内に移植した島の人の気持ちのゆかしさも推し量られた。たとえそれが小さくてもか細くてもいいではないか。その木一本の運命や歴史に、驚かれるではないか。

買い物をキャビンにしまった後、「暑い、暑い」と二人とも水着に着替えた。有美は昨日とはちがう、黄色のビキニをつけて胸を張って出てきた。わたしにはもう着られない水着で、その若々しい肌とともに軽い嫉妬がわく。進介の視線が発情期のオス犬のような雰囲気で、有美の胸や尻をなめている。

「おい」と沖の方で建雄が呼んでいる。わたしも水中眼鏡とシュノーケルをつけて二人といっしょに建雄の方へ泳いでいく。黒潮から直接流れ込んでくるこの島の水は、暖かくてきれいだ。底質はストーン、海草を繁らせたロックがところどころにある。建雄に近寄ってみると、何か口の大きな赤っぽい二十センチくらいの魚とタコを突いていた。建雄はそれを見せて無邪気に自慢する。また、ミノカサゴがいるぞ、とわたしたちをそこに導いた。浅い海底の岩の中ほどが割りぬかれたような中に、それは白い貴婦人のようにたたずみ、胸びれをゆっくり動かしていた。わたしたちを警戒しているが、有美が潜っていたずらをしかけても、自分の毒の威力を十分知っているというのだろう、その居心地のよさそうななわばりを手離そうとはしない。その穴には左右からきれいな水が入りし、海藻が揺れている。

わたしたちはしばらくその辺を潜ったり泳いだりしていたが、そのうち進介と有美は「また潜ってみる」とヨットに帰った。有美の希望でヨットにはタンクも積んである。午前中も二人はこの前島周辺でダイビングをして、「サンゴ発見!」とか何とかいって騒いでいたのだ。

しばらくして建雄とわたしもヨットに戻った。日にあたりすぎたのか、少し頭痛がしてきたので、わたしはもう身体を拭いてTシャツと短パンに着替え、木陰にかけたハンモックにぶらさがった。

ネットに身体をやらわらかく受け止められて、寝ころんでいる。まだ湿っている肌は、風を敏感に感じている。目を閉じる。木陰でも臉の奥に赤い光が押しってくる。背後の山で蝉が鳴きしきっているのはじめて耳につき、こんな海辺でもと少し驚く。

「お互い、もう三十だぜ。来年あたり結婚しようか」と、さつき抱き合った後、建雄は言った。このごろ、冗談ともつかず、建雄はよくそんなことを言う。わたしはあいまいに笑うか茶化すだけ。そんなわたしの態度を建雄がもの足りなく思っているのはわかっている。でもわたしは、そのことになると自分の気持ちに整

理がついていないのだ。建雄とは大学のヨット部時代からの付き合いだから、もうずいぶんになる。今さら建雄と同居する意味が、あいまいといえばあいまいなのだ。妊娠でもすれば、しかたなく結婚式をあげて同居して、私の中学校の勤めは産休育休をとることになるのだろう。そうしてしばらくは家で子育てして、やがてまた学校に復帰することになるのか、それとも健雄の転勤とか何とかを契機にもう教員生活からは身を引き、家で子育てしながら一日中建雄の帰りを待つ暮らしになるのか、などといちおうは想像してみるのだが、でもそんなことにまるで現実感がない。健雄と同居して暮らすということにも、自分の子供を産み育てるということにも実感が伴わない。

でもわたしの逡巡の因は、結局、長い付き合いの間に建雄が何人か他の女と付き合っていたことをやはり許せないところにあるのかもしれない。建雄にとつてはそれが弱みで、それでわたしに遠慮しているところがある。もし、わたしが消極的なので、建雄がしびれをきらして今、誰か他の女と結婚することになったとしたらどうだろう、わたしは悲しむだろうか。それもわからない。いや、きっと、そうなのかとあきらめるだけだろう。そんなことで、わたしの日常も未来も変わりそうもない。わたしの日常や未来？未来？でもそこにいったい何があるというのだろうか。

少少とうととしたらしい。目を開けると風景が新しい。頭痛はほぼおさまっていた。建雄は、さっきわたしが寝ころんでいたデッキにサングラスをかけて横たわっている。

珍しく、島の子供たちがこの入江に遊びに来ている。岸から二十メートルくらいのところで、よく日焼けした小学生の男の子が三人、それぞれ手にヤスを持って、さかんに潜っている。遠くからわたしたちの存在やセーリングクルーザーを気にかけてもいるのもわかる。わたしは、岸辺まで行って、

「どう、何が突けるの。おい、ぼくたち、何が突ける？」と叫んでみた。どこへ行っても子供たちに目がいつてしまうのは教師の習性だし、またその男の子たちの中に、友恵さんの息子の良人君よしとがいるかもしれないという気楽さもあった。でも何も返答はなく、水中眼鏡のガラス越しにわたしを確認すると、逃れるように三人ともが急いで尻を立てて潜ってしまった。そのあわてぶりがおかしい。漁るふりをしながら、わたしの場所からしだいに遠ざかっていった。

島の子供たちは、都会のわたしの教え子たちとはちがって、ああやって遊びながら泳ぎや海をおぼえていくのだ。今の島の漁師たちも皆ああやって少年時代の夏を過ごしたのだろう。亡くなった俊ちゃんも、きつと少年のころ何度もこの入江に来て、ああして潜って遊んだにちがいない。さっきの少年たちの一人が、俊ちゃんだったような気がしてくる。

日がいくぶんかげってきた。この海辺にも赤トンボがさかんに飛んで、もう秋が近いと思わせられる。お盆も終わり、夏はすでに下り坂だ。季節と自分の年齢

が描く線は、感覚的にだんだん重なってくるような気がする。するとちやうど今ごろの季節を、自分は生きているのかもしれない。

帽子をかぶり、そのまま浜辺を、ぶらぶらと防波堤の方に歩いた。吊り橋を渡る。橋は四、五十メートルほどの長さで、橋の下は浅瀬だ。やっと小さな漁船が行き交えるくらいの水路しかなく、風や潮の流れが強い時は地元の漁師でも注意深く航過している。

防波堤はどっしりと高さも幅も六メートルくらいあって、崖がなだれ落ちているところから伸びだし、大きく弧を描いて漁港を囲んでいる。いや、いかにも巨大なので、港ばかりでなく小さな集落全体も含めて抱いている感じだ。以前国から第何種かの避難港の指定を受け、十年近くをかけて大工事をしたのだと友恵さんは言っていた。

この防波堤の上を歩くと、友恵さんから聞いて忘れられない話が二つある。一つはハツパ（発破）のことだ。友恵さんがまだ小学生のころ防波堤はまだ建設中で、さかんにハツパがあつたのだという。発破の予告はかんたんで、港の方からウー、ウー、ウー、ウーとサイレンが鳴りだす。それを聞くと外に出ていた大人も子供も、家の中か、家の北側の壁に寄り添って隠れる。五分くらいして爆破がある。音響と振動の後、数秒してばらばらと石や岩のかけらが空から降ってくる。かなり大きなものも降ってきて、屋根瓦や窓ガラスを割ることもあつたという。友恵さんの家は港に近いので、だいぶ被害を受けたそうだ。「はじめは怖かったよ。空から濡れた石が降ってくるんやからね。戦争みたいやった。でも、そのうちみんな慣れてしもてね。子供はああ、あそこへ落ちた、ここへ落ちたと、小さなお祭りみたいにおもしろがつてたわ。都会では考えられないことでしょ」と友恵さんは笑った。

もう一つは、防波堤から落ちて亡くなった女の子のことだ。わたしはそのことを聞く前、はじめてこの防波堤の上を歩いた時から、何かそんな気がしていたのだ。防波堤の上には柵も手すりもなく、注意して歩かないと危ない。上から怖がりながら下を覗いていると、かつて誰かの小さな身体がそこから落ちて頭を割って死んだ、そんな酸鼻な場面の幻がやってきてぞっとしたのだ。そしてそれは事実だった。

それも友恵さんがまだ小学生のころ、「ううん、島の子ではなかったんよ。島の子はね、活発な男の子なんか、両手の指だけで堤防の端っこにつかまって身体をぶらさげて、遊んだりしてたんよ。その子は建設会社の人の子で、あんたたちが船着ける前島の港のあたりにね、当時はちよつとした宿舎があつて、そこから毎日島の学校に通ってたんよ。あたしと同級生の女の子と、二つ下の弟と。その女の子はね、サッチャンゆうたけど、色が白うてかわいくて、勉強もよくできてね。本を読むのが好きな子だった。あたしも仲良くしてたんよ。ある朝、登校の途中でそのサッチャンが堤防から落ちて死んだの。本を読みながら歩いてたんだ

って。いつもいっしょに通ってくる弟が、堤防の上に座って一人ぼんやりしてたんだって。島の人が遠くから見ているも、男の子はいつまでも動かないだ。これはおかしいとかけつけてみたら、そうなってたんだって。診療所のおじいさんの先生が救急処置をして、急いでヘリを呼んで病院に運んだんじゃけど、もうだめだった。あたしたち同級生は、それは泣いたんよ。一人が泣きだすとすぐ他の子に感染してね。何日も何カ月もね、あの子を思い出すたび泣いてたわ」

わたしは多少恐れながら防波堤の上を歩きたび、その二つのこと、ハツパのことと死んだ女の子のことを、気持ちを含めて話していたそのときの友恵さんの声や表情とともに思い出す。いや、それらの話はまるで磁力でも備えているみたいに、不思議なことに、年に数回くらい、都市の学校や自分のアパートの中にいるわたしの頭の中に突然よみがえる。空から濡れた石や岩のかけらが降ってきて逃げ惑い、またおもしろがった子供たち、そんな島での暮らし、そして本を読みながら踏み外して落下していった、わたしと年のいくらかも違わない女の子のこと……。それらと、そんな経験もせずいちおう都市の中で育ってきたわたしとは、どこでどうつながるのだろうか、どうつながらないのだろうか。

防波堤の付け根の方、郵便局の裏手から人が現れてこちらの方向に歩いてくる。島の女性たちがしているように手ぬぐいで日除けをした上に麦藁帽子を被っているが、ワンピースの裾をひらひらさせている。あれは友恵さんにちがいない。わたしは手を振る。向こうでも気がついていたらしく、さかんに手を振って答える。近づくとも手を取り合う。

「昨日はごめんね。忙しくて。購買に来てくれたらよかったのに」

「夜、たずねて行こうかなと思ってたの」

「ああ。そうそう、夜、ウチに来なさい。そしたら、いっしょに棧橋にアジ釣りに行こうよ。良人にそう言って用意させるけんね。アジをいっぱい釣って、あした食べたらええよ。冷やす氷もようけあるけん」

友恵さんはもともと人好きで、それに誰にでも分け隔てなく話しかけられる人のような。友恵さんの言葉はいつも歯切れがよい。そしてウソがない。ウソがないから、言葉がきれいだ。友恵さんと話すとき、わたしはいつものように相手の思惑を探る必要がない。そしてわたしの方も気楽に思うままをしゃべればよい。友恵さんとはじめて会ったとき感じたのも、そういう気安さだった。

「建雄さんはどこに？」

ヨットで寝てるというと、笑って、

「気楽でええね。夜は、よかつたら建雄さんや他の人たちも連れてきなさい。竿やエサはあるけんね」

礼をいうと、

「あたし、今は、時間がなくて。それでも勤務中じゃけんね。話は後でね。あんととはいっぱい話がしたい。久しぶりだもん。ほな、夜、必ずおいでね。待つと

るよおっ」

それだけ言うとは後ろを向いて早足で去っていった。昨日組合で目を泣き腫らしていたときよりは元氣そうに見えた。前よりも腕周り腰周りが太くなったようだ。購買に勤めるばかりでなく、畑仕事もこなせば、夏には近くの海に潜って貝や海藻を獲ったりもするらしい。たくましい島の女なのだ。接するだけで元氣をもらえる気がする。

夕食のときは、波止場に出した白いテーブルを囲んでまた前夜のような騒ぎになった。建雄らが獲ったタコや魚を刺し身や焼き魚にして皿に盛り、冷えたビールやワインも入って四人は陽気になった。昼間の泳ぎで、皆日焼けしている。ラジカセの音楽に合わせて踊った。たそがれの、他には誰もいない海辺でわたしも笑いころげ、解放感を味わった。こんな時は建雄がリーダー格で、しきりに冗談を飛ばし、まず歌まねをして、おもしろく踊りだす。進介がそれに続く。そのようすは学生時代と同じだった。調子のよすぎるところもあるが、わたしは建雄のその屈託なさが好きだった。今でもそれは変わらない、と思う。でも、そんな建雄をどこか突き放して、客観的に眺めるわたしもたしかにいる。

ひとしきりの宴は、でも学生時代の合宿などとは違って、四人では寂しいところもあった。すぐそばから、島の沈黙と闇がわたしを取り巻き、見つめていた。防波堤はくろぐると、昼間よりももっと威圧的になって、向こうの世界を遮断していた。

いっしょに片付けを終えた後、有美は携帯で長電話している。次々に友だちにかけて、この島は何もないよ、おもしろくない所だ、としゃべっている。波のほかには物音の乏しい空間には、甲高い有美の声はよく通る。ここまで来て、電話でおしゃべりなの、女子学生みたいに、とわたしは言いたい気持ちがあるが、言えばオバサンと思われそうで言えない。有美とは六つも齢が離れている。そんなふうの旅先でも街の中でもケータイを多用するのは、彼女たちの世代にとってはふつうのことらしい。帰宅してまでもそうだとしたら、彼女たちには一日のうち、自分一人の時間というものがあるのだろうか。いや、逆に彼女たちにとっては、わたしがケータイも持たないのはすでにオバサンの証拠なのだ。わたしも建雄からプレゼントされて一時期は持っていた。便利なことは便利だがうるさくもあつた。それに維持費や通話代もばかにならない。で、オバサンとしては、恋人の意見も無視してお払い箱にした。

友恵さんのところには、結局建雄とわたしが行くことになった。でも懐中電灯を手二人で集落に入って少し歩いていくと、漁業組合近くの店先の縁台で飲んで顔見知りの漁師に出会い、どこに行くのかと問われ、棧橋にアジを釣りにと答えると、そんなもんいつでも釣れる、まあ、ここに来て飲め、これうまいぞ、食べてみい、と建雄はたちまちそこに引き入れられてしまった。裸電球の下で、

若い漁師も含め、上半身は裸や下着姿の四人がテーブルにコップと皿を置いてくつろいでいる。わたしも腕までつかまれそうになって引き留められたが、行くところがあるので、と何とか切り抜けた。建雄は早くも冗談を飛ばして皆を笑わせ、あてがわれたコップのビールをおおっている。わたしを一人にしておいていいの。どこでも調子の軽いヤツだ。わたしは懐中電灯で照らしながら、両側から屋根がかぶさっている狭い路地を抜け、一人で友恵さんの家に向かった。

今はもう使わなくなってコンクリートで蓋をされている共同井戸のそばから石段を少し上がると、友恵さんの家がある。島の家の造りはいつ来てもおもしろい。右手に玄関、入ると家の右側は土間が奥の勝手口まで続いている。たぶんその造りは仕事の都合を考えたもので、漁師なら、仕事を終わって家に帰ると玄関から入ってそのまますつと進んで勝手口に行き、水瓶の水や水道で手足やら長靴やらを洗うことができる。女が畑仕事から帰ったときも同じだろう。台所には煮たきをする土製のオクドがまだ使われていたり、地面を四角に掘り下げたさつま芋の貯蔵穴があったりする。部屋は田の字型とでもいうのか、表に座敷と仏間の二間、裏にも奥の間がある。風呂やトイレは外。今ではこの島でも、土間のない新しい作りの家が増えているようだが、友恵さんの家はまだ、そんな古風な構えだった。夏なので、今は玄関も座敷の戸もすつかり開け放ち、明かりが煌々と庭先に落ちている。

その庭先から声をかけると、「まあまあ、靖子さん、入って入って」と友恵さんがエプロン姿で出てきた。

「ちようどよかったわ。今まで幾子のところに行ってたの。幾子は大変。かわいそうで。まあ上がって。こっちの方が座敷より気楽でいいでしょ」と台所の方に招じ入れられる。板間にちやぶ台、夏用のいぐさのざぶとんが置かれている。蚊取り線香のにおいが鼻をつく。奥の部屋でテレビを見ていた友恵さんのお母さんが身体を起こしてわたしに挨拶する。すぐまた横たわり、ウチワを使っている。一人息子の良人君は、夕食後友達の家遊びにいったという。わたしはささやかな手土産を渡し、ほかの三人が来られなかったことを詫びながら言いつくろう。

友恵さんは、

「まあ、気をつこてもろて。こんなもんええのに。みずくさいねえ」と手土産に繰り返して恐縮しながら、

「まあ、建雄さんがゴンさんにつかまったって？そらなかなか離してもらえんわ」と、冷蔵庫から麦茶を出しながら笑う。夕食は済んだかと聞かれて、済ましたという、冷蔵庫から皿を出してきて、タコの卵よ、珍しいでしょ、もらい物、おいしいわよ、つまんでみなさいと薦めてくれる。酢醤油で味付けしてあり、コリコリとしてあっさりとい味だ。

「ああ、やつとゆつくり話せるね。どう、元気にしてた？」

続いてスイカを出してくれながら、友恵さんが訊く。

「ええ。まあ何とかやってるわ。毎日同じ繰り返しだけだね」

「そう。建雄さんとはまだ？」

「ええ、まだ」とわたしはうなずき、友恵さんも「そう」と受けるが、それ以上は訊かない。

「大阪はどう。変わった？」

会うと友恵さんがいつも聞きたがることだ。大阪は友恵さんが以前住んでいた所だからなつかしさもあるのだ。わたしは、大阪のどの街のどこにどんなビルが建った、こんな店ができた、港はどう変わった、などと思いつくままに話す。友恵さんはふんふんとうなずき、「そうお」「へー」などと合いの手を入れながら、まるで少女のように熱心に聞いている。そのようすがかわい。でもたぶん、友恵さんの頭の中に大阪の正確な地図はありそうもない。地下鉄や、梅田やミナミの地下街となると、友恵さんにはもう迷路のようなものなのだ。ただ、以前に住んでいたという港近くの下町については、マーケットがあつて、銭湯があつて、神社があつて角に電気屋があつて、とやたらと詳しくあつた。

でもそうして台所に落ち着いた友恵さんを見ると、わたしはあるかなわなさを感じてしまう。齢はわたしと二つほどしかちがわなはずなのに、何か、経てきた人生の質とか量とかにさげすみがあるように思えてしまう。

以前に聞いた友恵さんの今までの人生（わたしは忘れないようにパソコンで打ってファイルしてある）——友恵さんは島の中学を卒業すると、下宿をして四国本土の高校に通った。高校を卒業してからはいろいろあつたそう。まず愛知県に出て、ある自動車メーカーに就職した。でも仕事の単調さと環境に馴れず、一年ほどで辞め、それから島の人のついでで大阪の下町の料理屋で働くようになった。そのころは空いている昼間はアルバイトもしたそう。父を早く亡くしたために、二人の弟の学資を友恵さんが稼がねばならず、せいぜい働く必要があつたという。わたしが同じ大阪の大学で、建雄たちとのんきに遊んでいたころのことだ。「わあ、そのころ、あんたも大阪におつたん」「そう、そう」と二人で偶然を喜び合ったこともあるけれど、でもそのころは二人の生活も心も交差しようもなかつたわけだろう。

大阪時代にもとの旦那さんとめぐりあい、同棲して、二十二歳で入籍した。その人は東北の出身で、料理屋の板前をしていた。やがて子供、良人君が生まれた。ところが二年ほどで旦那さんとうまくいけなくなり、島の生活がひどくなつた。くもなつて、思いきつて子供を連れて帰郷した。旦那さんとはまもなく離婚したが、子供の養育費は今でもきちんと送ってくるそう。帰郷してからは、幸いすぐに組合の購買部に口があつて勤めだした。でもそれだけでは足りず、連絡船で運ばれてくる荷物の配達も引き受け、山の畑も耕した。そのころ弟たちはもう成人して本土の会社に勤めていたが、母親と子供の面倒は友恵さんが見なければならなかつた。そんな生活が今でも続いている。

話を聞きながら、「本土の街に出たら、もっといい働き口があるのどちがうの？」と言ってみたことがある。すると友恵さんは、手を横に振って、「いいのいいの。もう、街はたくさんよ。息がつかまってしまう。貧乏でも、不便でも、あたしはこの島がいい。きれいな海があるしね。あんたらにはわからんでしようけど、あたしにはここが一番よ。生きてる感じがするもの」とあっさり言うのだった。

友恵さんが島に帰ってきたばかりのころに、はじめてわたしは建雄たちとこの島に来たことになる。わたしはまだ二十三歳、就職した年で、学校勤めの緊張から解放されるために建雄たちと夏休みを合わせてヨットでやって来た。ヨットを前島の港に係留して、狭い平地に蝸集する古びた集落をも珍しく眺めながら購買に買い出しに行ったとき、はじめて友恵さんに出会ったのだった。友恵さんは雑多に品物の並んでいるうす暗い店内でひとり明るく、親切に應對してくれた。こんな感じのいい、若い人がここに、とわたしはたちまち彼女に惹かれた。何度か会って話をしていくうちに親しくなった。

友恵さんを通じて、わたしはこの島や島の生活について知った。いや、冷たくこの島、島の生活というよりも、この島で人が生きる、島に抱かれながら生きるという感じ、その生存感覚のようなものに少し触れられた気がしている。島は遠い昔から抱くようにして人々を生かし続けてきた。それを島の深さ、といってもいい。島の人々は何十代もここで死に代わり、生き代わりしてきたわけだろう。今の友恵さんたちはその後裔で、先祖と同じように島に抱かれ、海を恵みとして生きている。それはわたしには、もの珍しさを越えて、驚くべきことのように思えた。それまでわたしは知らなかったもの、知らずに来た生存の感覚だった。島に抱かれて生きる、なんて。

でも、友恵さんほどではなくても、海はわたしにも親しいのだ。小学校の高学年まで、わたしは都市近郊の海辺の町に住んでいた。夏になると水着を着たままで家を飛び出し、砂浜に走って泳いだものだ。海水はそれほどきれいではなかったけれど、泳いだり潜ったり魚を追いかけたり、十分楽しめた。ヨットの旅が好きなのも、学生時代に自動車の運転免許よりも早く船舶操縦免許をとったのも、その子供のころの記憶につながっている。この島にもだからわたしは惹かれていくのだろう。私の海よりもっと海らしい海がこの島にはある。海と島に抱かれて、人々は暮らしている。長く長くそうしてきたのだ。この島の深さをもっと知りたいと思う。そしてわたしの心の底に共鳴するものをたしかめてみたい。よりよく生きるということが、そこから開けてくるかもしれない。

開け放した勝手口から良人君が帰って来た。この間来たときは、小学校に入ってたで初々しかかったのに、もう四年生だという。身体も大きくなって、わたしを見て少しはにかんだ。「大阪の靖子さんよ。学校の先生。あんた、おぼえてるでしょ。挨拶しなさい」とお母さんに言われて、坊主刈りの頭をことんと落とし、表

の座敷の方に流れるように行ってしまった。するとまた勝手口から人が入ってきた。俊ちゃんの姉の幾子さんという人だった。声もかけず、履物を脱いで板間に上がってくるなり、友恵さんの膝に顔をうずめてすすり泣きをはじめた。友恵さんは手を幾子さんの背中に置いてゆっくりなでている。わが子をいたわる母のようだ。

「イクう、泣いたらええよ。思い切り、泣いたらええよ」そう言う友恵さんも涙声になった。二人の悲しみはわたしにも伝わってきて、こんなのをもらい泣きというのかななどと思いつながらわたしも涙をこぼした。

五分もそうしていたか、幾子さんは急に起き上がり、少し泣き笑いのような表情を見せて、「ごめんね」と友恵さんにともわたしにともなく謝った。そして、勝手口から帰っていった。

「イクはね、一人ぼっちになってしもたんよ。五年前に、お母さん、去年お父さんが亡くなってね。どっちも病気だったけど。それに今度は弟でしよ。五年の間に家族を皆亡くしてしもた。こんなことがあるんやねえ、と皆でびっくりしてるんよ。ううん、イクは早う嫁いで、三人も子供がおる。嫁ぎ先では幸せにやってるんだけどね。実家の方が、あつという間に滅びてしもた。イクがいちばんかわいそう、と皆ゆうてるんよ」

友恵さんは、そう言った後、座敷の方に、ヨシ、釣りに行くよ、用意して、と声をかけた。もうできとる、と声がして、良人君が現れた。エサは？冷蔵庫の中や。おまえも行くやろ。行つてもええ。そやそや、勉強しようないもんな。そんなんちがうわい。ほな、靖子先生、美人やからそばにおりたいんやろ。ちがうわい、アホ。そんなん言うんやたら行つてやらん。まあまあ、この子は一人前ゆうとる。はよはよ。靖子さんも行こ。あしたのおかず、釣つたらええ。

集落の狭い路地に両側の家々から明かりが落ちているが、雨戸を閉ざした古家も何軒かあった。浜に出ると、薄暗い堤防の上でウチワを持った老人たちがしゃべりながら涼をとっていた。棧橋にはいくつか灯った明かりの中に先客が五、六人いた。子供とおばさんばかりだ。都市近郊の他人同士が集まる釣り場などとは違って、ここには家族的な雰囲気がある。島全体が一つの大家族だとしたら、この夜の波止場は小さな居間でもあり台所でもあるのだろう。良人君が、用意してきたバケツに海水を汲み、さすがに馴れた手つきでその中に冷凍のアミを解いてエサを作る。それからわたしに釣竿を渡してくれる。自分もサビキにエサを入れてほうり込み、「こうやったらええんや」と竿を上下に揺らす。たちまち小アジが一匹かかった。得意が顔に浮かんでいる。「良人君は上手やなあ」と、わたしも同じようにするが、二、三度エサを入れ替えても釣れない。そばに並んだ友恵さんは笑って、「そのうちに回ってくるから」とおうようだ。

何年か前の夏、やはりこの場所で友恵さんに教えられながらアジ釣りをしたことを思い出す。そのときは死んだ俊ちゃんも来ていて、わたしのからまった釣り

糸を明かりにかざしながら解いてくれたりした。無口なようだったが、いつも白い歯の笑顔が印象的で、すてきな漁師さんだなとわたしは思っていた。島の女の子たちの人気ナンバーワンよ、と友恵さんが冷やかした。俊ちゃんのことを友恵さんに訊いてみた。

「俊ちゃんね、あんたも知ってるでしょ、男らしくて気のやさしい、いい子だったわ。婚約もして、結婚式の準備にかかっとったのね。…そう、あの日はね、海が荒れてたのに、本土からの釣りの人が、どうしても今日中に帰らないと会社の仕事にさしつかえるとゆうんで、無理して船を出したんよ。その客を送り届けての帰りに、海がもつと荒れてきた。もう少して島に着くとゆうところで、無線が急に途絶えたんよ。海が少しおさまってから、島じゅうの漁師が捜索に出た。海上保安庁も来た。本土の方の漁師たちも協力してくれたんよ。でも見つかったのは船の残骸だけで、俊ちゃんは見つからなんだ。二週間も捜索は続いたけど見つからなんだ。その後でも、俊ちゃんの友だちは捜し続けてね。そして一カ月も経って、四日前に、お観音さんの浜に打ち上がっとったのを見つけたんよ。かわいそうに、もう顔も何もわからなんだって。それでも、見つからんよりはええ、ずつとええ、お観音さんが引き寄せてくれたんじやって、島の人はゆうとるわ」。

聞きながらわたしはまた涙がにじんできた。時化の海で俊ちゃんの船が大波にひっくりかえされる。俊ちゃんは海に投げ出される。呑み込まれ、底に引きずり込まれる。それできれいな笑顔をもっていた、恋人もあつた俊ちゃんの人生がぼきりと折れた。そして遺体は浮いたり、沈んだり、岩に削られたり魚に食べられたりしながら海原を漂い、一カ月かけて島の観音のもとに戻ってきた。

友恵さんはさらに、意外なことを言った。

「俊ちゃんね、あんたのこと、好きだったんよ。あんたは知らんでしょうけどね」

思わず「どうして？」とわたしは問い返した。

「あんたにあこがれてたんよ。一時期のことだったとは思うけど。ううん、あたしも俊ちゃんから直接聞いたわけでない。でも、わかるの。女の勘よ。…あたし、俊ちゃんとあんたが結婚できんかな、と想像したこともある。でもそれは夢のような話。どうしても無理なこと。俊ちゃんだって、そんなことよくわかってた。だからあんたに言わなかった。そうでしょ。島の男は純情だからね。そしてあきらめたんよ」

わたしは暗い海面を見つめながら茫然とする。俊ちゃんあの笑顔には、わたしへの特別な気持が含まれていたというの？そういえば思いあたることもないではない。いつか俊ちゃんが好意で自分の漁船に乗せてくれて、島を一周してくれたことがある。仲間の女の子といっしょだったけど、俊ちゃんは恥ずかしげに、でも晴れがましそうに、自分の家の庭を案内する調子でここ、かしこと説明しな

がら巡ってくれた。わたしはそのときも、屹立する岩場や大洋から打ち寄せる波を受け入れて潮の花を吹きあげる洞穴や観音の浜などをはじめて知り、島の深さに出会えた思いがしてとても嬉しかった。そしてあのとき、俊ちゃんの強い視線を感じ、心の波打ちがなかったとはいえない。後で仲間の女の子も、あの子はあんたが好きなようだよとか何とか告げた。だけど……。

「靖子さん、ごめんなさい。あんたを困らせるつもりはなかったの。気を悪くせんでね。ごめんね。あんまり悲しすぎて、あたしも頭がどうかしとるわ」

「ううん、いいのよ。嬉しい……と言っているのかな。でも変な気持ち」

友恵さんの言ったように、そのうち小アジの群れが回遊して来た。光に透かすと、緑っぽい背を見せた群れが水中や水面をさ走り、餌を投げるとすぐに何匹も喰いついてくる。それでも良人君も友恵さんも、釣り人は皆、さわぐこともなく、当たり前のようにして釣り上げている。わたしはなるべく明るくふるまおうとしたが、頭の中は混乱していた。

それから釣れたり釣れなかったりしたが、小一時間ほどで獲物はクーラーボックス半分ほどになった。友恵さんは、その大半を、「あした、焼いて食べなさい」と言ってくれたしに渡してくれる。わたしはありがたく受け取った。でも友恵さんには悪いが、このアジは食べられない気がした。それはわたしの気弱さなのだろうか、俊ちゃんの身体が数日前まで漂っていたこの海の魚は、しばらくは食べられないと思えたのだ。

「あした、島は休日よ。漁も休み、連絡船も購買も休み。お観音さんのお祭りがあるけんね。店も出てにぎやかだよ。あたしもヨシも行く。あんたもぜひ来なさい。あんたなら、きつと楽しいよ」と帰り際に友恵さんが誘ってくれた。島の北端にある観音堂が島の信仰の中心で、あしたはその祭礼日、本尊のご開帳もあり、境内では屋台も出てにぎわうのだという。友恵さんの好意も嬉しく、わたしはぜひ行ってみたいとなった。それに、なぜだかわからないが、そこに行けば俊ちゃんに会えるような気もしたのだ。

帰り道、さつき建雄と別れた店先の縁台にはもう誰もいなかった。もう、あいつはわたしを迎えにも来ないでと小腹をたてながら、一人で懐中電灯の光をたよりに、なかなか重いクーラーボックスを肩に、防波堤を恐れながら吊り橋を渡ってヨットのところに帰った。すると、建雄は薄暗いヨットのともの方で、一人海に向かって缶ビールを飲んでた。「何よ、建雄は！」と、味わった恐怖のぶんだけ声が大きくなった。でも建雄は振り向かない。明かりの漏れているテントの中から進介と有美が出てきて、

「建雄は荒れてるよ。何や、漁師とケンカしたらしい」と不安そうな顔付きで告げた。「で、怒って、あした早うに出航するとゆうてるよ。勝手ね」

建雄のそばに行き、「どうしたの」と訊くが、建雄は海の暗がりに向いて何やらしきりにつぶやいているばかりだ。耳を近づけると、「あいつら、あいつら」と憎

さげに繰り返している。「あした、出航するって？」と訊くと、

「ああ。あした出航や。おまえがこんな島に来たいってゆうから。どこがおもしろいんや、こんなとこ。何もない。教養もない人間たちが、時代遅れの生活しとるだけやんか。俺は来とうなかつたんや、こんなとこ。せつかくの夏休みが、台なしや」

「あんた、そんなことゆうの。酔っ払い。ひどいわ。何があつたか知らんけど、わたしはあした、ここにおるからね。友恵さんと約束したんやもん」

「勝手にせえ。俺は行くからな」俺のヨットは俺の自由にする、と言いたげだ。彼はとても幼くなっていた。

すぐには眠れないような気がして、クーラーボックスに残っていた缶ビールをとり、蚊取り線香をそばに置いてハンモックにまたぶら下がった。夜気は少し冷えてきたが、肌に心地よいくらい。月はなく、綿雲がゆるく流れているが天の川や星座がきれいだった。目をこらすと飛行機ばかりか、陽光を受けて輝く人工衛星が星の間に弧を描いていくのまで見分けられる。

わたしの中の混乱もまだ続いていた。俊ちゃん、もしほんとうにわたしのこと好きだったのなら、何で言ってくれなかったの。言ってくれたら、わたし、考えたわ。考えて、きつとこの島に嫁いで来たわ。いやいや……できなかったかもしれない。わたしにあなたのお嫁さんが勤まったかな。この島で。友恵さんもあるけれど、でも疑問だ、それは大いに疑問だ。でも、せめてあなたに抱かれるくらい、わたしはしたかった。それだけでもあなたとわたしが、島とわたしがつながることはできたでしょう。

二十年近くも前に、あの防波堤から落ちて死んだ、建設会社の社員の娘の女の子ね、その女の子のことも俊ちゃんはきつと好きだったでしょう。都会から来た、色白の賢い女の子。防波堤をはじめ歩いて歩いたとき、まだ聞いてもいなかったのに、わたしの頭にとっさにその情景がはつきり浮かんだ。きつとその女の子はわたしに何か伝えたかったのよ。俊ちゃんのお嫁さんになりたかったことかもしれない。その女の子も死に、そして俊ちゃんも死んだ。女の子は防波堤から落ちて、俊ちゃんは船から落ちて。二人とも死ぬにはいかにも若すぎた。もしかすると、あの防波堤から落ちた女の子、その一部はわたしだったかもしれないわね。そんな気がするの。

ともかく明日、観音さんのお祭りで俊ちゃんに会えるかもしれない。その女の子にも。会えたら二人に尋ねてみたいことがいっぱいある……。

次の日の早朝、四人で話し合い、建雄も少し折れて、結局わたし以外の三人は出航して、さらに南方を回り、夕方は島に回航してきて停泊し、翌朝いっしょに帰ることになった。テントや荷物の一部を残し、建雄はまだ渋い顔をあらためず、三人は出航していった。

一人取り残されたわたしは、しばらく浜辺で泳いだり、またハンモックにぶらさがってぼんやりすごすしかなかった。でもそれもこの島を味わうひどく貴重な時間に思えた。建雄があんなだと、もうこれからはヨットでこの島を訪れることはないかもしれない。それはわたしにはとても残念なことだ。この島の渚、海、防波堤、山の緑、蟬の声、岩肌、灯台、空の光、そして人々の暮らし、もう少しでわたしに感じ取れそうな何か……。

約束の十時より半時間も前に、表わら帽子の友恵さんが防波堤から吊り橋を渡ってやってきた。わたしの姿を見つけて、

「ああ、よかった。あんた、おったんやねえ。さつき、ヨットは朝早く出たと聞いたもんじゃけん、もう、びっくりして、飛んできたんよ」

わたしは昨夜からのいきさつを説明する。ケンカのこととは友恵さんも知っていた。

「たいしたことはないんよ。建雄さんが、ちょうど店に買い物に来た島の娘になんかちよつかい出したゆうて、そばにおった若い衆の一人がからんだだけ。二人とも酔っ払ってたんよ。気にすることないのに。ガンさんがそうゆうとつたよ」

「建雄も、調子がよくて、スケベやからね」二人は声をあげて笑った。

わたしたちの前を人がさかんに流れていく。どこにこんなにたくさんの人がいたのかと不思議に思うくらい、老若男女、大勢の人たちが先になり、後になりして汗をぬぐいながら細い山道を登っていく。わたしたちもその流れの中にいて、先になり、後になりしている。弁当やお供えを入れたリュックを背中にして、友恵さんがわたしのすぐ先を行く。友恵さんは人気者で、誰彼から声をかけられ、元気な声と笑顔で返している。時々振り向いてわたしにも言葉をかけてくれるが、わたしはもう息が上がつてしまつてよく答えられない。「意外に体力ないね」と冷やかされたが、ふだんこんな舗装もしていない山道は歩かない。友恵さんはやや太り肉なのに、たくましく歩を踏んでいく。

海上から見るといかにも小さな島なのに、こんなに深い山と長い山道があったのかと驚く。そこを皆がただ歩いていく。山を歩くのはあたりまえの風景であるにしても、現代ではまったく珍しくこの島にはいまだに自動車やバイクが一台もない。集落の中にも外にも車道というものがなく、移動は昔ながらに歩き、荷物は背負うかりヤカーによる。セーリングで瀬戸内海や沖繩の島々をたくさんめぐったが、車がまったくないという島はなかったように思う。そのためか、この島の集落に一歩足を踏み入れるだけで、時代のギアが一段も二段もチェンジされる気がするのだ。

あたりの植物は、これも暖流の影響なのだろう、常緑のものが多く、しかもたとえば八手の葉っぱが大阪などよりはずっと大きい。路傍のミミズも太く、道で死んでいるゴキブリも黒くて大きい。狭いだんだん畑が道の左右に続く。谷川を

せき止めて作った、島の水源になっている溜め池のところ、友恵さんが指をさして、

「あたしの家の畑が、この向こうにあるんよ。今はスイカとサツマ芋を作ってる。水やりが大変。タゴをかついで水をやるの。畑仕事は、昔から女の仕事よ。大変。男は海、女は畑」と言った。

峠にたどりついて一息つき、汗を拭い、リュックの水を飲んだ。地藏の祠の前で、たくさんの島の老人たちがベンチや木陰に休んでいて、年期の入った島の間はこんなだというように、白髪や禿頭や皺だらけの顔を並べている。黒っぽい着物姿が多く、女は皆日除けの手拭いをかぶっている。友恵さんは皆と挨拶を交わし、老人たちもおうように返す。わたしの方をじろじろ見つめる目もあり、それには友恵さんがうまくとりなしてくれる。老人たちはうなずき、一人の白髪の痩せた老婆が、「ああ、お観音さんにお参りにな。それはええこっちゃ」といって微笑した。「お観音さん」という、この島で独特な響きをまた聞いた。島の人々が口にする「お観音さん」は、親しげでしかも無上の敬愛、信頼のような気持ちがかもつている。今日も夏らしい好天になったが、この峠には心地よい風がわたっている。

後から追いついてきた元気な子供たちが、峠で休むこともなく、大人たちを尻目に、そのまま反対側の坂を駆け下りていった。もうそろそろ観音堂の境内に店が出るころだという。良人君も朝早く、小遣いを持って友だちと出かけたそうだ。

下りは九十九折りの急坂が続いたが、そこを下りきると急に視界が開け、空気も変わった。島には乏しい田圃が、こちらの山と向こう側の観音山の間広がっている。もう一面黄金色で、風が熟した稲の実のにおいを運んでくる。「わあ、こんな所があるんやねえ」とわたしはまた島の深さに驚く。これでは、ただの漁村とはいえないではないか。山らしい山もあれば畑も田圃もある。

島の地理を簡単に反芻してみる。本島のいちばん南側の平地には集落、いわば人々の日常生活の場だ。それを取り囲む山やこの田圃、そして海は生産の場。そしていちばん北側の観音山は神聖な信仰の場所、ということか。いや、この分では、わたしの知らない不思議の場所がまだまだ島のあちこちにあるにちがいない。蟬たちがおびただしくうなっている山裾をたどってゆくと、田圃の中を観音山へと横切る道になる。ちょうどその向こう側から、二十人ほどのおばあさんたちの行列がゆつくり渡ってくる。皆、手拭いをかぶり、数珠を持ち、お遍路さんのような白い着物姿で、声を合わせてお経か何かを唱えているようだ。さつきから鈴や鐘の音が遠く聞こえていたが、この一行の先頭の人たちが鳴らしていたのだ。田圃の中道にいた数人は歩みを止め、道を譲り、手を合わせている。友恵さんも足を止めて、

「観音講のおばあさんたちよ。島では、お坊さんとこの人たちがお寺の信仰行事の中心になるの。こっちの山の中にあるお堂までお参りに行くんよ」

その行列が近づいてくると、友恵さんもうなだれて合掌した。わたしもまねをする。鐘の音は耳に響き、読経の声は意外にも張りがあって若々しかった。一行を見送りながら友恵さんが、

「あたしも、もうすぐ観音講に入るんよ」とやわらかい表情をする。

「へえ、友恵さんも。まだそんなに若いのに？」

「若いもんは若いもんで役目があるの。島の女はね、三十過ぎると皆信心深くなる。ほんまよ。あたしも娘のころは、どうしてそうなのかわからなかった。お祖母ちゃんやお母ちゃん有信心見ても、辛気くさい気がするだけだね。世の中には楽しいことが他にいっぱいあるのに、何を好んで信心なんか、と思とったわ。でもね、今になったらちよつとわかってきたような気がするんよ。子供を持つとね、自然とその無事を何かに祈りたくなるでしょ」

「それは、わかるわ」

「それにね、家族だけでなく、自分自身のためでもあるのよ。女も三十過ぎると、ほら、何かと心配事や苦勞が多いでしょ。だから何かにすがらないではいられない。こんな気持ち、靖子さんにはまだわからんかな。男や子供は、ほら、何だかんだいっても、結局は女の苦勞の種よ。ほんで、最後まで頼るわけにはいかんもんやわ。それでね、島の女たちはお観音さんを信心するわけ。昔からそうしてきたんよ」

「そう。うーん、わたしなんかには、まだちよつとむずかしい心理かなー」と言っただけで、

「そうそう、あんたはまだまだ男に十分頼つとるようじゃけんねえ」と、友恵さんも声を出して笑った。

それにしても、「島の女は三十過ぎると皆信心深くなる」とは、まるで源氏物語の時代の女たちのようではないか、と唐突な連想が浮かぶ。するとそれは一つの古典的な女の生き方だということか。

ああ、そうだ、沖繩にもそんな島があると、昔、大学の講義で習ったことがある。それはたしか久高島という小島で、そこでは三十過ぎた女たちは皆、祭の儀式を通じて神女になるのだという。あれは比較的好きだった民俗学の授業だった。いつもにこにこしている初老の教授が、スライド写真を示しながら、「もし皆さんがこの島の女性に生まれたとしたら、皆さんは、三十歳を過ぎたころ、この祭に参加して巫女にならなければなりません。そうして、以後、死ぬまで、巫女として神に仕える生活をおくるのです。巫女になるということは、ある意味で俗世を捨て、神に仕える女になるということ。だからこの女性たちの白装束と洗い髪は、死と再生の意味があるのです。そしてこの女性が皆巫女になるということ、これはこの島の特殊な事例のようですが、しかし、日本の古代は一般的にそうだったのだ、という説もあります。……私の考えでは、昔はこうして女性は三十代くらいで仮にいったん死に、以後神に仕える女性として生き直したのです。昔の女性

はこの世で二つの人生を生きたわけですね……。そんなふうな話だったが、当時はいかにもわたしたちの生活とは縁遠い、古風なことをやっているな、と思っただけだった。でも、祭の儀礼のスライドに写った、髪を振り乱した白装束のわたちの真剣な表情には鬼気迫るものがあり、ここには何かがあるのだろうと思わせた。

この島でも「三十過ぎると女は皆信心深くなる」と友恵さんは言う。それはやはり女は三十代でいったん死に、再生して生き直すということか。「生き直す」とはどういうことだろう。スライドの中の白装束と今目の前を過ぎていった白い着物姿が重なる。あのガジュマルの群落もあるこの島は、やはり黒潮で、はるか南の島々とつながっているのか、そうではないのか。でも、今ではそんな生き方からは遠くわたし、いやわたしたちは生きている。ではわたしたちは、生き直してもせず、何に頼って生き続けているだろう。男か、家族か、仕事か、街のうごめきか、情報社会か、バーチャルワールドか、それとも自分自身か、自分自身のあくなき欲望か。

「友恵さんは、もう再婚しないの？」

わたしは訊いてみた。友恵さんはふり返って、

「そんな話もあるんじゃないけどね。漁師の島でしょう、嫁不足でしょう。島では独身の女ってなかなかもてるんよねー、バツイチだつてもねー」と笑った。「するかもしれんね。でも今はまだええ。これでも離婚の傷は深いけんねえ。良人がもう少し大きくなってからかな。今のままでも何とか食べていけるしね」。

田圃の中道を渡りきって、山ふもとを迂回するように細道を行く。左手は葎の生えた広い池で、幾種類かのトンボや蝶が舞い、濁った水面には草亀のどかに顔を出している。その道が笹群に行き当たる所で右手に折れると、石で囲いをした井戸があった。その水をサビの出た手押しポンプで汲んで、わたしたちは手や口を清め、ついでに汗を拭いた。友恵さんのTシャツの背中は汗の染みが地図を描いている。わたしの背中や首筋もびっしりだ。

そこから左に曲がって少し進むと、木の間隠れに大きな屋根瓦のお堂が見えた。境内の方からおおぜいのざわめきが聞こえてくる。

「ここはツヤド。昔は何か願をかける人がここで逗留したり、お通夜をしたりしたの。この島のお観音さんは靈験あらたかだというので、昔は遠くの町や村からもたくさんお参りにやってきましたというわ。今でも泊まれるように布団を置いてある。小学生がね、夏休みに先生と泊まりにきて、肝試ししたりもするんよ」。

その境内はテニスコート二つ分くらいの広さがあり、すでに善男善女があふれていた。山陰や木陰にゴザを敷いて、もう弁当を広げている人たちもいる。境内を囲むように島のいくつかの商店が屋台を出していて、子供たちが群らがついている。また子供たちはおもちやを手にしたたり、鬼ごっこをしたりして騒いでいる。島の子供ばかりではなさそうで、友恵さんによればこの観音さんの祭日には、島

を出ている家族もたくさん帰ってくるのだという。どうりで、来る道々も、よそ行きの装いをした知らない顔の人々が多かったわけだ。どこからか良人君が現れて、得意げに新しい銀色のピストルを振りかざしてみせる。

「あんまり無駄遣いせんときよ」

「わかつとるわい」

「ああ、弁当渡しとくわ。それとも、お母ちゃんといっしょに食べるか？靖子さんもいっしょやで」

ちよつとわたしの方も見て、

「いやじゃ。友達と食べるわ」

友恵さんは、弁当の包みと缶ジュースを良人君の背中の中のスッパックに入れてやる。彼はそれをもどかしげに、また流れるように人込みの中に紛れていった。「もう、あの子は！」と渋い顔で見送る友恵さんも、二十年くらい前は、きつとおかつぱの髪かお下げの髪で同じようにこの境内を走り回っていたにちがいない。靴を脱いでお堂に上がると、ここまでは電気が引かれていないのか、薄暗かった。たくさんのロウソクが点り、線香のにおいが満ちている。

畳の上では大人たちが数列に座って数珠を繰りながら読経したり、隅の方でくつろいだりしている。友恵さんはリュックから菓子を取り出して、屈んで正面の白木の祭壇の前に進み、お供えを上げ、ロウソクを一つ点した。祭壇にはすでに菓子や果物が山をなし、その下方には名を記した一升瓶も並んでいる。読経の人たちの後ろに座って友恵さんも合掌し、何やら小声で唱えはじめた。わたしもそばに座る。目が馴れてくると、祭壇の奥の方で真っ赤に燃えあがっているものに気づく。火炎をまとう、恐ろしい形相の不動明王だった。その奥の薄暗い祭壇に、秘仏になっているのか、閉じられたままのお厨子がある。

また、くすんだ梁の上をぐるりと取り巻き、見下ろしているものたちがある。奉納された絵や写真の群れだった。わたしはその中の、あざやかに彩色された一枚に何となく心惹かれる。青い大波に翻弄されている船、そこで空を見上げ手を合わせて真剣に祈っているちよんまげ姿の男、左上に金色に輝く観音菩薩の姿。嵐の海で観音を念じて助かった男が、お札に奉納した絵らしい。近づいて下の枠に墨で書かれた文字を読むと、わたしの生まれるずっと以前、わたしの祖母もまだ生まれていないような遠い昔の年代が書いてあった。

「ちよつと待っててね」と言い置いて、友恵さんはお堂の右手の方へ行った。そちらにはお茶の接待をする人たちが集まっているようだ。わたしはまた畳に座る。境内もこのお堂の中も人の声に満ちているのに、不思議な静けさを感じる。それはきつとこのお堂の中の闇の豊かさのせいだろう。こんな闇は、都市でのわたしの生活の中にはない。照明を落としたバーなどはわざとらしい。昼も夜も、わたしたちは闇を仇のように振り払って生きているわけだ。でもこの闇の慕わしさは……。またここは、子宮の中に似てもいるとも思う。大きなものの胎内で、

島の人たちはやすらかになごんでいる。いや、子宮というなら、このお堂ばかりでなく、この観音山全体がそうだろう。この山は老いも若きも、いつも帰ってこられる島の子宮なのだ。きつと子宮の中にも、ほどよい闇が住んでいるのだろう。

「靖子さん、さあ、浜に降りて弁当食べよ」戻ってきて友恵さんが言う。「上のお観音さんのご開帳は一時からじゃ。まだだいぶ時間あるけん」

通夜堂から一つの細道が浜の方へと下っていて、そちらの方へ行く人、反対に戻る人たちがいくらかいる。雨になると水が流れるのか、道の中ほどが深くえぐれて歩きにくい。

浜に出る手前の、道の向こうの側の山陰に、やや広い空き地が見えた。木々や夏草が繁茂しているが、ところどころ崩れた石垣の廻りが見え、人の気配がわずかに残っている。「あれは、小屋の跡？」島の漁師が網小屋でも建てた跡かと思っただの。

「ううん。昔、ここに住んだ人たちがおったんよ。でも食べていけずに、皆滅びてしまたとゆうわ。奥の方にはその人たちのお墓もあるらしい。怖いから、見たことないけどね」

「今の島の人たちのご先祖ではないの？」

「ちがうらしいわ。遠くから来て住みついたんやって。海賊だったともいうわ」と言って友恵さんは笑った。

空間の広さや石垣の具合からすれば、かつて四、五軒の家屋がそこには立ちならび、男や女や子供たちが海を相手に暮らし、耕作もしていたのだろうか。なぜまたこんな不便な場所に住み着いたか。どんな事情があったのか。そもそもいつの時代のことなのか。その人々の暮らしも心も、濃い霧がかかったように幻すら見えない。

広い浜は灼け、白く発光していた。日陰を求めて端の岩陰の方に行くと、いくつかの家族がやはり弁当をつかっていた。適当な場所に敷物をして座る。「口に合わんかもしらんけど」と、友恵さんが弁当を渡してくれる。心からお礼をいう。

浜の傾斜が急で大きな丸石が多いのは、潮の流れと波風が強いせいだろう。大きな流木がうち上がり、大小いろいろの人工物が死骸のように浜を荒らしている。

「この辺ね、信じられないでしょうけど、七、八年くらい前まで開発の計画があったんよ。東京の会社に、もう少しのところを買収されるところだったんよ」と友恵さんが箸を動かしながらいう。たしかに、目の前の荒波うち寄せる自然そのままの浜を眺めているとにわかには信じにくい。

「ほら、さっきの昔の人の住みかのあたりにリゾートホテルを建てるというんよ。田圃や池は全部つぶしてテニスコートやら何やら作って、この浜はビーチに変えるというの。船のつけられる立派な栈橋も作る、島に車の走れる海岸道路もつけてやるというの。島の人たちは少し乗り気になった。業者は口八丁手八丁でしょ、役所に働きかけたり、町や組合の幹部をハワイ旅行に招待したり。ホテルができ

たら島の人がどれだけでもうるか、うまく語るんよ。

ところが、それがまったくのウソだった。リゾート開発というのは口実で、ほんまはここに産業廃棄物の処理場を作る計画だったんよ。どうも話がおかしいので、島の役員が聴いてもなかなかほんまのことを言わない。喧嘩腰で問い詰めたら、やっと白状したというの。それがわかると島の人はもちろん大反対。どうして都会の産業の出した有害なゴミを、この島が引き受けないといけないのか、まして神聖なお観音さんの山ふもとに、とんでもないというわけ。危なかったんよ。ひどい話でしょ」

「ひどい。ほんとうにひどいね」

一旅行者にすぎないわたしが聞いても、ぞつとするような腹立たしい話ではないか。そんな話に乗らなくてよかった。もしそうなっていたら、今ごろここは悪臭満ちる産廃の山。島の暮らしはすっかり変わっていたにちがいない。島が島でなくなっていたにちがいない。都会の人間は、どこまで身勝手に横暴なのか、どうして自分たちの都合だけで島を自由にしてよいと考えられるのか。

「それとは別にね、ほんまのリゾートの計画も、あることにはあるらしい。こっちは県や市が中心になつとるんやけどね。ほら、瀬戸内海にも三本の橋がかかって、高速道路も便利になつて、観光の範囲が広がってきてるでしょ。今は不景気じゃけん、計画だけですんどうるけど、そのうちほんまにここにホテルでも建つかもしれへんわ」

「島の人は観光開発に反対なの？」

「そう。もともと島は漁師気質で、俺たちは貧しくても漁の腕一本で食うていく、という気風やからね。でも、お金もほしいけん、将来はどうなるかわからん」

「友恵さんも反対？」

「そう。あたしもどつちかというところと反対。よそからたくさんの人や物が入ってきたら、大変。島はすっかり変わってしまう。上手に言えへんけど、金銭的に多少豊かにはなつても、心のどこかががっかりしてしまうと思う。島の人は、自分たちの島なのに、小さくなって暮らすようになる。きつとそうなってしまう。」

でも、ほんまは難しいんよ。島は今でももう年寄りばかりでしょ。こんな、今どき車も走ってないような小島に、若い人は残ってくれへんわ。漁も年々、寂れてきてるしね。このままいけば、この島はいつか滅びてしまうかもしれへん。誰もいなくなるかもね。観光開発されたら、変わるやろうかね」

百年後、この島はどう変わっているだろうとわたしはふと思った。誰も住まなくなつて、あの昔の住居跡のように、こぼれた石垣だけがひっそり残されているだろうか。それともリゾートアイルランドに変貌し、島とは無縁な人々が自由に遊び回っているだろうか。いずれにしても、現在まで営々と細々と続けてきた島の生活の歴史はどこかに隠れ去るしかない……。

「この浜なんよ、俊ちゃんが流れ着いたんは」

どこと指さすこともなく、友恵さんが声を落として言った。風はそれほどでもないのに、荒波が寄せてくだけている。

「そうなの」と答えて、話に聞いた無残な光景をわたしは想像せざるをえなかった。

「あの頂上にね、お観音さんが祀られてるの」

振り返って見上げると、形よくせりあがる三角錐状の山の斜面の頂上付近は、濃い緑の森に覆われている。

「お観音さんが俊ちゃんを呼び寄せてくれたんじゃわ、と島の人みんなゆうとる。……でもイクにはそう思えない。それだったら、なんで俊を助けてくれなんだのかって、あたしにこぼすの。お観音さんには勿体ないようじゃけど、あたしはイクの気持ちもわかる。わかった上で、イクに言うの。おばあさんたちから聞いた言葉じゃけどね、お観音さんが何でもようしてくれるわけではない、そんな力はお観音さんにもないんじやって。だから人はさだめを受け入れて、自分で努力せんとあかん。でも、お観音さんはいつも、深いところで見守ってくれてるって」

さつき見た見た通夜堂の、嵐の海で観音に助けられた絵。そうした霊験が昔からたくさんあったとしても、たしかに俊ちゃんの命にまでは及ばなかった。長い間には、俊ちゃんのように海の事故で死んだ漁師たちもたくさんいたことだろう。それでもこの島で信仰は滅びない。むしろ、つらいことが重なれば重なるほど、島の人たちは信仰を大事にしてきたのではないか。峠地藏のところでは休んでいた皺深い老人たち、田圃の中道を白い装束で読経しながら渡っていた観音講のおばあさんたち、薄暗い通夜堂に集まっている人々。信仰って、何なのか。

友恵さんと通夜堂の方に戻り、その境内の端から左右にくねる山道を登る。タブや椎の木のうっそうとした林の中で、参道に木漏れ日が暑苦しく落ちていく。蝉の鳴き声がいっそうかしましい。蚊やアブがまつわり責めてくる。そこをたくさんの人々が語らいながら、また老人を助けながら登っていく。子供たちも早足で登っていく。浜から見上げた山の頂きまで登るのだから、道は遠かった。息が切れ、また友恵さんに冷やかされた。あえぎながら、でも頂きの奥の院に何があるものか、ひそかに楽しみにしていた。もしかすると、島の一番奥深いらしいそこには、島の一番の秘密が隠されていて、今日はそれを見ることができるとも思えない。

たどり着いてみると、木の根這う奥の院の境内は狭く、お堂も思いのほか小さかった。でも清浄な雰囲気はどこよりも漂っている。崖の下から波の騒ぎが這いのぼってくる。頭上を木々の枝をぎわめかせて風が渡る。狭い境内の左右には、苔むした石塔や石仏がおびただしく置かれ、古い年号がそこに読み取れたりする。

奥の院の中には人が満ちて、入れそうもない。お堂の前で合掌して祈り、右手の方へ友恵さんについてゆくと、ふと明るい空間が開けている。踏み込むと、か

すむ大洋の青色が飛び込んできた。その向こうに紀伊半島の山の稜線がかすかに望める。波の音が急に高まった。柵もほどこしていない、岩の先の方におそるおそる身を乗り出すと、足元からは、目にはほとんど垂直なくらいの傾斜で、崖が海になだれ落ちている。下方で波が岩に激しくくだけている。「すごいわ」というふつうの言葉を、わたしは思わず呑みこんだ。

通夜堂の境内に引き返し、たたずんでいると、急にお堂の中で読経が始まった。まず木魚や鐘の音とともに、祭壇の正面に座っているきらびやかな僧衣のお坊さんのしわがれた声が聞こえたが、しばらくしてコーラスのように女たちの合唱が始まって、お坊さんの声を圧倒した。お堂にあふれている白装束は、先程出会った観音講のおばあさんたちらしいが、驚かされたのはその声に張りがあつてひどく艶やかなことだ。感情が豊かにこもり、どうかすると、それは観音菩薩への恋歌のように聞こえる。

「あ、イクじゃ」友恵さんが指さす方を見ると、二人の女が境内から観音の浜の方に降りていくところだった。一人は幾子さんだった。黒っぽいワンピースを着て手に数珠を持ち、麦わら帽子を被っている。「その先に立っていくのは由香ちゃん。俊ちゃんの婚約者だった子」と友恵さんはわたしに教えると、「ちよつと行ってくるけん、この辺で待って」と二人の方に急いだ。道の途中で三人はしばらくしゃべっていた。友恵さんが手のふりを交えてしゃべり、他の二人は聞き役のように見えた。日傘をさしてやはり地味な色のワンピースを着た由香さんという人は、すらりとして髪の毛の長い色白の娘で横顔が美しかった。でも表情は乏しく、青ざめているようにも見えた。二人は浜の方に降りていって、いっしょに俊ちゃんを弔おうというのだろうか。

わたしももう一度、白く発光する観音の浜を眺めたくなくなった。

「由香ちゃんがおらんじゃ」。

次の朝早く、出航の準備をしているわたしたちの所に来るなり、友恵さんが告げた。新聞紙に包んだ海産物の干物などの土産を手渡してくれるのもそこそこに、昨夜から自宅にも集落の中にも由香さんの姿が見えず、便船で本土に渡った形跡もない、騒ぎになりかけているのだと一気にしゃべった。話を聞いた町の世話役たちが、山や海の搜索を開始するかどうか今相談しているところだという。行方不明者が出ると、漁師は仕事を休み、中学生まで加わって島じゅう総出で山や海を搜索するのが昔からの習わしだという。以前そうして見つかった自殺者もいたのだとまで、友恵さんは涙ながらにしゃべった。いつもは明るい人なのに、今回は友恵さんの泣き顔をよく見てしまう。

私には何もできない。予定通り出航するしかない。でもひどく心配だ。

「友恵さん、由香さんは必ず生きてるよ。死んだりしない。観音さんも俊ちゃんも由香さんをきつと守ってくれるよ」と肩を抱いて慰めた。たんなる慰めではな

く、ほんとうにそのはずだ、それ以外のことはありえない、あつてはならないと思つた。

友恵さんが「またおいでね。待つとるけんね」と寂しい笑顔を作つて言つて去つた後で、わたしは不審がる三人にかんたんにいきさつを説明した。するとすぐ、建雄が薄い笑いを浮かべながら、

「へえ。えらい純情なんやなあ。島の娘は」と皮肉っぽく言った。それに有美が、「死んだ婚約者のために自殺するなんて、今どきそんなん、はやらへんわ。考えられへん」と応じた。わたしは思わず有美をにらみつけ、気づいたら建雄の頬を平手で強く打つていた。後ずさつた建雄は、「何するんや！」と怖い顔をした。私は三人から離れてうずくまり、ひとしきり泣いた。背後で「あいつはどうなつとんのや。ほんま、このごろ付き合にくいぞ」という捨て台詞のような声があった。わたしの中でふつと今、係船ロープが切れるように何か切れたと思つた。

ヨットはエンジンを動かして前島と本島の間の狭い水路をゆつくり抜ける。吊り橋の下も通り過ぎる。建雄は不機嫌な顔でラダーを取つている。進介と有美も黙つている。島陰を過ぎ、しだいに沖合に出た。エンジンを停止して、追い風にメインセイルをいっぱいに張るとヨットは北に向かつて快走を始めた。海の色がたちまち深くなった。島を離れていく者へのあいさつのように、うねりが船底を重く叩き、飛沫が内側を濡らす。私は藍色の海を見ている。青い水をスクリーンにして、島で会つたたくさんの顔が流れていく。友恵さん、俊ちゃん、幾子さん、由香さん、峠の老人たち、観音講のおばあさんたち、境内の子供たち、良人君、名も知らない島の人たち……。

まだいくぶん色づきの残る朝日をいっぱい受けた島がしだいに遠ざかつていく。島の東側の寝々たる崖の連なり、黒々とした小さな岩たち、小さな浜も。うねりを呑みこんで返し、高く潮を吹きあげている洞穴もある。漁船が数艘出ていく。やがて波の向こうに、島の北端の観音崎がくつきりと望まれた。下から見上げても、あんなにも直立した、高い崖だ。

由香さんはきつと生きている、死ぬはずはない、死んではならないと強く思つた。